2018 年度夏季

地方課題解決
合宿型インターンシップツアー
石川・島根コース

成果報告書

東洋大学国際教育センター

留学生就職支援室

目次

はじめに 2

第一部　石川コース成果報告 3

概要及び日程 5

参加者名簿 6

成果報告 9

石川県地方課題解決型インターンシップ報告書／インターンシップで経験したこと／石川県の和菓子業経営の一事例と展望／石川県の魅力と感想／地方問題や解決策／石川県と石材店での経験と感想／石川県の能登での体験と思い出／石川県西能登志賀町の発展を支える伝統的な文化／一生の記憶

コース感想 33

第二部　島根コース成果報告 35

概要及び日程 37

参加者名簿 38

成果報告 41

インターンシップの成果と報告／島根県のインターンシップについて今後の課題と対策

コース感想 49

おわりに 50

はじめに

東洋大学は、留学生の就職支援を積極的に支援している大学として、日本政府の文部科学省平成 29 年度「留学生就職促進プログラム」に採択された東京で唯一の大学である。本学は金沢星稜大学、島根大学とコンソーシアムを組み、東京と地方都市の間で留学生の「I ターン就職」を促進している。昨年度のプログラム採択以来、2017 年 8 月に島根県で 3 日間の企業見学ツアー、同年 9 月に石川県で 3 日間の企業見学ツアー、そして 2018 年 2 月に島根県で 4 日間の企業見学及び一日就業体験ツアーを企画し、述べ 50 名を越える本学留学生に地方の優良企業を知る機会を提供してきた。

そして本事業採択 2 年目となる今年度はこうした企業見学ツアーを発展拡大する形で、その地方での就業体験の機会だけでなくその地方の生活や文化を知る機会を質量共に増やすツアーを企画した。それが地方課題解決合宿型インターンシップツアー石川コース・島根コースである。石川コースは 8 月 29 日から 9 月 7 日の 10 日間、くまの地域づくり協議会 Community Design Room 関係者の協力のもとで実施され、島根コースは 9 月 8 日から 18 日の 11 日間、島根大学関係者の協力のもとで実施された。両コース共に 10 名の本学留学生が参加し、事前に現地の歴史・文化や工業・産業、観光を調査した上で、現地での活動を通じて地域振興や地域創生の課題について考えた。こうした成果を実際に地域振興や地域創生に活かしてもらうとまではいかなくても、東京の留学生と地方都市を繋ぐきっかけになればと考え、作成したのが本報告書である。本書内ではツアーの概要及び日程、参加者名簿、そして成果報告がまとめられている。成果報告内の日本語については編集を行なったが、ツアーを通じて留学生が実際に感じ、考えたことを報告するため、内容については留学生の意見をほぼそのまま掲載している。理解不足な部分や考察が未熟な部分も多々あると思われるが、ご容赦いただければ幸いである。

最後になるが、本ツアーを企画実施するにあたり、石川ツアーではくまの地域づくり協議会 Community Design Room の梢正美氏、清水雅成氏に、島根ツアーでは島根大学国際交流センター特任講師の佐々木亮氏に多大なるご尽力及びご高配をいただいた。この場を借りて改めて感謝申し上げる。

新井　保裕（東洋大学国際教育センター特任助教）

第一部

石川コース成果報告

概要及び日程

概要

事前に石川県について調査をした上で，実際に現地（石川県羽咋郡志賀町）に赴き，民宿や古民家を拠点に，地域づくり協議会主催セミナーで地方の生活や歴史・文化，工業・産業，観光を学び，祭りや生活，伝統産業（醤油蔵，豆腐，水産加工，石材，和菓子）を実体験することで，東京ではなく地方で生活すること・働くことについて考える。合宿型ツアーや事前・事後研修を通じて地域創生，地域振興の課題解決を主体的に試みる，課題解決型インターンシップである。

日程

事前研修①：2018 年 7 月 28 日（土）於東洋大学白山キャンパス
事前研修②：2018 年 8 月 28 日（火）於東洋大学白山キャンパス
ツアー　　：2018 年 8 月 29 日（水）～9 月 7 日（金）於石川県羽咋郡志賀町

日時	行程
8 月 29 日（水）	現地へ移動，民宿での暮らしを学ぶ
8 月 30 日（木）	古民家での暮らしを学ぶ
8 月 31 日（金）	【豪雨に伴い予定順延】
9 月 1 日（土）	祭り体験
9 月 2 日（日）	祭り振り返り，志賀町見学
9 月 3 日（月）	就業体験
9 月 4 日（火）	就業体験【台風に伴い午前のみの実施】
9 月 5 日（水）	移住者の話を聞く，就業体験振り返り
9 月 6 日（木）	ツアー振り返り
9 月 7 日（金）	金沢市見学

事後研修　：2018 年 9 月 29 日（土）於東洋大学白山キャンパス

就業体験協力企業

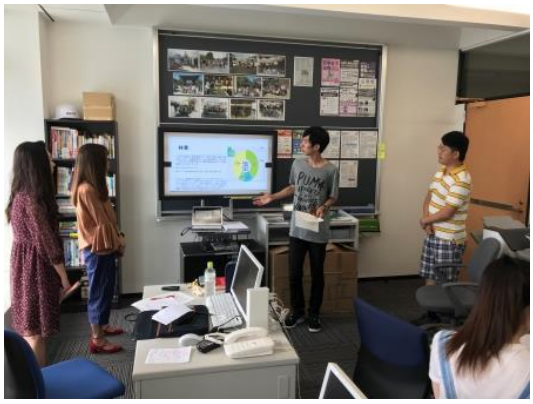
業種	事業者名	ウェブサイト URL
和菓子	お菓子のこぼり	http://togi.notohanto.net/shop/kobori
醤油製造	カネヨ醤油	http://kaneyo-syouyu.jp
石工製造	中島石材店	http://nakashima-sekizai.com
干物製造	西海水産	http://www.noto-saikai.jp
豆腐製造	高橋豆冨店	http://sunrize-donut.com

参加者名簿

	氏名	所属	学年	国籍
1	カン　セツクン	経済学部国際経済学科	3	中国
2	カ　カコウ	文学部 国際文化コミュニケーション学科	2	中国
3	SONG SHIHAN	情報連携学部情報連携学科	2	中国
4	張　毅恒	法学部企業法学科	2	中国
5	劉　忠銘	社会学部社会福祉学科	2	中国
6	DOAN NGUYEN THAO MY	国際学部 グローバル・イノベーション学科	2	ベトナム
7	NGUYEN THI LE HANG	国際観光学部国際観光学科	2	ベトナム
8	KATHERINE WYNNE	食環境科学部食環境科学科	2	インドネシア
9	呉　尚蓉	理工学部応用科学科	2	中国
10	ダオティトゥ　ガン	国際学部国際地域学科	2	ベトナム

引率：新井　保裕（国際教育センター）
現地コーディネート：梢　正美，清水　雅成
（くまの地域づくり協議会 Community Design Room）

古民家での集合写真



事前研修

民宿での夕食

祭り体験

民宿女将と地域振興を考える

西海水産就業体験

高橋豆冨店就業体験

お菓子のこぼり就業体験

中島石材店就業体験

カネヨ醤油就業体験

移住者の話を聞く

民宿女将、若女将と共に

事後研修

石川県地方課題解決型インターンシップ報告書

カン　セツクン

１．感想

初めて石川県志賀町を訪ねて、どこまでも続いている美しい里山里海の自然風景に驚いたが、車がないとあしがない不便さにも驚いた。

日本に来てから、ずっと東京で暮らしてきた。旅行で関西などの地方に行ったことはあるが、実際のライフスタイルは全く感じられなかった。そのため、「東京文化」は「日本文化」だと思ってしまい、故郷である中国の東北地方と大部違うと思った。今回矢田地区で住民の方々と一緒にお祭りに参加して、異文化を体験することを通じて、日本の地方は故郷と同じ文化や習慣がたくさんあることが分かった。

また、東京で暮らしている多くの人は自分のプライベートと他人のプライベートを重視して、人と人の絆やつながりが薄いと私は日本人に対するイメージを持っていた。今回の 10 日間の体験を通じて、そのようなイメージが変わった。10 日間付き合った優しい梢さん、いろいろ教えてくれた清水さん、おもてなしで招待してくれたおかざき荘のお母さんとお姉さん、道を歩いている時に声をかけてくれたおばあちゃん、出崎邸で出会った皆さんのおかげで、異国でも、始めて訪ねた地域でも暖かい人間関係を感じることできた。

そして、10 日間で 30 年ぶりの洪水と 25 年ぶりの台風という 2 回の自然災害にあって、人生初の避難体験もでき、避難センターで避難食を食べた。このような人間の力で抵抗できない自然災害にあったときに、自分を守る上で、皆さんと助け合うことも自分の能力の一つになるだろうと考えている。

さらに、人口の減少による空き家が増え、伝統的な家を建築する産業が少なくなり、あるいは経営方針などを変えなければ経営しにくくなることも感じた。また、若い時に都会にある親戚の銭湯で働いていたが、今銭湯もどんどんなくなったと出崎邸のお爺さんが話した。地域過疎化の進行とライフスタイルの変化により、地域の伝統産業が衰退してきて、厳しい経営現状に陥っている。

２．提案

10 日間の生活を通じて、志賀町の課題を解決するには、人を招くことは最も重要な課題だと私は考えている。そのために、5 つの提案を挙げた。

<u>提案１．志賀町地域内企業の見学ツアー</u>

石川県及び周りの県の大学、専門学校と連携して、地域就職をサポートする。志賀町商工会と大学就職支援室を組み合わせ、域内企業の見学バスツアー、合同説明会など、あらゆる方法で域内の優良企業と起業・創業支援、志賀町ふるさと就業促進奨励金などの就職支援政策を学生に知らせて、地元就職を促進し、地域外の若者を招く。

提案２．外国人留学生向けの日本文化体験ツアー

県内にある日本語学校や専門学校の留学生をターゲットとする週末日本文化体験ツアーを作る。まず、古民家に泊まり、季節による夏から秋にかけて能登を熱くする「キリコ祭り」の体験、和菓子作り、及び志賀町観光スポット巡り、志賀町の昔話や物語を聴く会などのイベントから日本文化を体験できることを目指す。また県内なら、交通費などを抑えることができ、地域交流型合宿等助成金交付事業でツアーの参加費を安く設定できる。

提案３．中学生・高校生向け農業体験ツアー

耕作放棄地を活用して、固定のクラスやサークルなどのグループを対象として、年単位で農業体験ツアーを作る。種から収穫までのプロセスの体験を通じて、青少年の農業への興味や関心を高める。さらに、志賀町青年就農給付金をアピールして、農業起業家を育成する講座などのイベントを開いて、衰退した農業を元気にすることを目指す。

提案４．親子自然体験ツアー

自然を離れた都会で生活している小学生及び両親を対象とするツアーである。山も海もある志賀町は自然を体験する場所としては最適だと思われる。農業や林業、漁業などあらゆる１次産業体験を設定する。例えば、親子釣り、釣った魚などを自分で調理する。また、親子木植え、貝細工など自然との交流の中で、生きて働くことの重要性を感得させ、親子関係を深めることを目指す。

提案５．観光スポットをつなぐバスツアー

交通の不便は観光客に対する大きな歯止めになる。金沢から志賀町までの交通手段だけではなく、志賀町内での移動にも困ることになる。能登地域の観光の主要拠点である能登金剛や志賀の郷リゾート、世界一長いベンチ、キャンプ場や海水浴場など多様な観光資源を有つなぐ体験・滞在型の観光を目指す。

「志賀町産業振興促進計画」によると、消費購買力の町外流出を防止するため、主に幹線道路沿いに立地する郊外型の商店街において、多様化する住民ニーズに対応し、魅力ある商店街として「憩い」「遊び」「集い」の各機能を向上させることができるよう、商工会や関係団体との連携を図りながら、商業活性化に向けた事業支援に取り組むという商店街の活性化事業の推進を計画しているそうである。この計画を通じて、人口減

少・高齢化が進み、農林業・木材産業等の基幹産業の衰退が続く中で、循環型地域社会の構築と地域の経済構造の変革に取り組むことができると考えられる。

また、志賀町地域内にある各地区住民の地域コミュニティを形成し、高齢者の社会参画を促す。地域内の伝統産業や自営業、地域外の大学や協議会など多様な主体との連携をする中で、志賀町ブランドを作り、元気な町を目指している。

最後に、フェイスブック、ツイッター、ラインなどのコストの低い SNS 宣伝手法を活用して、志賀町の祭りやイベント、地元名産品 PR 及び観光情報を発信し、志賀町の魅力をより多くの人に知ってもらう。さらに、住民同士の情報交流促進手段として、域内の交流を高めることも可能であると考えている。

参考資料

１．賀町産業振興促進計画（平成 27 年 4 月 1 日作成)」（2018 年 11 月 12 日閲覧）
http://www.town.shika.ishikawa.jp/data/open/cnt/3/1546/1/1.pdf
２．「石川県志賀町移住定住サポートガイド」（2018 年 11 月 12 日閲覧）
http://iju-shika.jp/

インターンシップで経験したこと

―石川県志賀町の地域活性化について―

カ　カコウ

日本の総人口は 2008 年にピークを迎えて以来、ずっと減少し続けている。それに対して、政府はいろいろな政策を考え、対応している。しかし、都市部の人口が増加していながら、地方の人口は減少の傾向を維持しているのが現状である。

実は、この「都市の人口が増加、地方の人口が減少」といった状況と似たことは、1960 年代の高度経済成長期にもあった。人口が都市に集中しすぎたため、地方の若者が減り、農業する人は大幅に下がり、労働者が中心となる現代型社会に変貌してきた。それによる地方の若者の都市への人口流出の問題、そのうえで、少子高齢化が進行していることが、日本の各地方の深刻な問題になる原因と考えられる。

日本の多くの地方は同じ問題を抱えているが、なぜ志賀町に注目したかというと、今回東洋大学が就職支援をしたことによって、石川県の志賀町で 10 日間現地の生活を体験したからである。それに、地元の企業でインターンシップを経験したことができた。それを踏まえて地域おこしについて論じたい。

志賀町人口ビジョン（2015）によると、志賀町では少子高齢化が進行し、高齢化率は 40%で、日本全国平均 27%に比べて明らかに高くなっている。国立社会保障・人口問題研究所は志賀町の人口は今後も減少を続け、2060 年には現在の人口の約 4 割と予測されている。一方、日本創生会議の公表（2014）によると、志賀町は将来に消滅可能性のある都市に該当した。

ほかに、若者流出のデータからみると、進学や就職を機に志賀町を離れる人が多い。このような状況に対して、田村（2017）は、いかにして地域からの人口流出 を抑え，地域への人口流入を増やすかが地域の政策課題となっていると指摘した。そして、課題を解決する最も有力な手段は，大学進学および就職時の移動に対して働きかけることだと分かった。

最初に私はもし若者に働きかけて、若者の流出を食い止めれば、地方の労働力を保つことができるのではないかと少し考えたが、やはり無意味なことだろう。その理由は、2014 年度に実施された住民アンケートに、問い「志賀町に欠けているものは何だと思いますか」に対して、答えの 1 位が、「働く場所がない」（64%）という答えであったからである。たとえ働きかけて若者を地方に残そうとしても、働く場所がなかったら意味がないのではないだろうか。

しかし、志賀町でインターンシップ先（西海水産）の社員から聞いたお話によると、人手不足は深刻な問題であり、町内のすべての業種において人手不足になっている。会

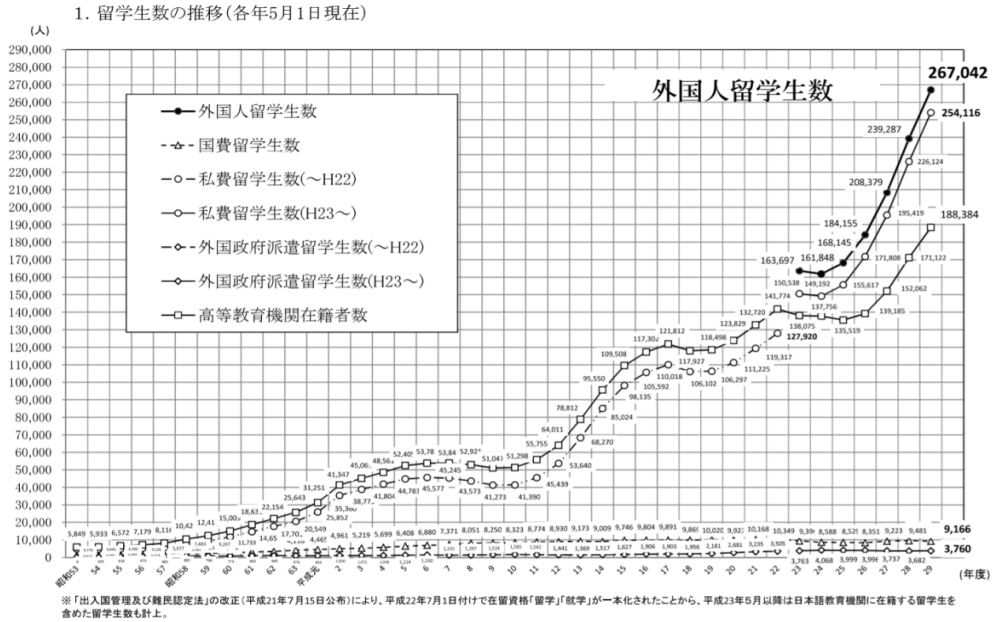
社側から「いくら募集しても、若い人はなかなかこない」という声が聞こえた。そこで、若者にとって、「働く場所が少ない」というより、魅力的な仕事が少ないといったほうが適切だと考えられる。

どのようにしたら若者にとって魅力的な仕事をつくることができるかは難しいことである。そうであれば、一旦若者の流出という視点ではなく、人口交流による人口拡大に注目してみよう。

能登は自然に恵まれ、観光資源を持っている点が大切である。志賀町における産業割合からみると、第三次産業の割合が一番高く、その中に、観光は主要産業の一つでもある。

いかにこの資源を活用していくかはおそらくいまの課題なのではないかと考えられる。

今回我々が体験した短期のインターンシップツアーというような観光や短期研修などのプランは、将来日本の企業で就職したい留学生や外国人によっては非常に魅力的なものだと思っている。JASSO（2017）によると、



平成 29 年 5 月 1 日までの留学生数は約 267,042 人、「留学生 30 万人計画」の影響でこれからも増加する傾向がある。これは身近で、利用できる資源だと思われる。

志賀町は、石川県の中心部から離れた位置にあるので、交通に関するやや面倒な問題もあるが、近くにいる、いわゆる中部地区での留学生数は約 22，000 人（8.3%）もいるので、まずさきに彼らに向けて地域の価値を伝えたらどうだろうか。志賀町あるいは能登の魅力を感じた留学生たちは SNS などのものを用いて、それぞれ個人やグループのネットワークから発信することによって知らない人たちに知ってもらうことができる。そのために、今回経験したキリコ祭りのように、過去の伝統を守るとともに、新しい価値を作っていく必要性があると考えられる。

参考資料

１.「志賀町人口ビジョン」、2015-10
２.「広報しか」、2016-08
３.「平成 27 年国勢調査」
４. 田村 一軌、2017、「大学進学にともなう都道府県間人口移動の定量分析 - 修正重力モデルによる分析 -」『AGI Working Paper Series』、2017-03、1-17。

石川県の和菓子業経営の一事例と展望

SONG SHIHAN

石川県は日本海側の中央部に位置し、地形的には南北に細長く、ほぼ南半分が加賀、北半分が能登と言われる。今回のインターンシップは主に能登半島の地域で行った。半島の二文字が付いているように、朝鮮半島のように経済社会的に低迷していることが分かった。

今回は御菓子のこぼりでのインターンシップをした。新しい創作菓子をめざし、日夜研究するという目標を持った家族企業である。今、この店を経営しているのは 4 代目の息子で、高校を卒業してから大阪のお菓子専門学校で勉強し、卒業後に 4 代目と一緒にこの店を管理している。しかし、石川県の人口の減少とともにお客さんは主に常連さんになってしまうので、何とかしないと経済的な困難に直面するかもしれない。

お店の人気商品は主に伝統的なイガラ万頭、麦こがしまんじゅう、きんつば、水ようかん、また若い人たちの味に合わせるため作られたチーズまんじゅうである。もちろん小さなお店なので、お菓子を作るのは機械ではなく、手作りであるがそのことについて次のように考えてみた。まず、昔、まだ機械生産を一部の企業しか導入していなかった時は、手で作ることが当たり前だったという一方、人件費の節約や製菓技術習得の省略できるため、機械を導入した。ところが、家族だけで営んでいるため、また需要量が大きいわけではないため、この点は多少避けられる。次に、素人と玄人の差はつまり同じ物を作れるかどうかの差で、一個一個、味や色や形が違うのでは話にならないということだ。手作りの方はいつも同じ材料を使っていても、微妙に質が違うことがあるだろう。最後に、今ではほとんど機械で作った和菓子であるが、たまには手作りの和菓子を食べて、職人さんがどんな気持ちでこの和菓子を作ったのか、想像するだけで、楽しいことではないだろうか。

今の石川県は過疎化、高齢化が最も深刻な地域になっている一方、新幹線開業や石川独自の魅力や全国トップクラスの住みやすさを活かし、魅力のある雇用の場の創出などを通じて若い世代を中心とした石川への人の流れをつくることができるではないだろうか。

石川県の魅力と感想

張　毅恒

三十年ぶりの大雨、四十年ぶりの台風に伴って、私たちの十日間石川見学ツアーも終わった。この間、いろんなことが発生した。新しい友だちに会うこと、職場体験のこと、知らない知識を勉強すること。それぞれ本当に忘れられない思い出だと思う。最後の発表に基づいて、三つのパターンに分けて、石川県の魅力と自分の感想を紹介したい。

１．事前研修篇

石川県は海と山に抱かれた緑と文化の地。人の暮らしの中で、長時間をかけて形づくられてきた里山里海や豊な食文化などについても、石川県独自の文化資源として位置付けられている。これは石川県の魅力の一つ。そして、産業の農林水産の中で、すごく有名なのは農業と水産業だ。これから主たる要因を紹介したい。石川の位置が一番重要な原因だと思う。石川県は本州中央の日本海側に位置するので、水産物が多い。そこは暖流と寒流が交わる海域のおかげで、四季を通じて多種多様な魚種が捕まえられる。十日間の最後の日に、近江町市場に行った。海鮮は本当においしかった。約 180 店の店先で、日本海の新鮮な魚や地元産の様々な商品と店頭ですぐに食べることができるお店、海鮮丼などの人気のお店がある。この現象に従って、おいしい海鮮とたくさんの店、水産業の発達は当たり前のことである。

農業ならば、やはり大きな土地面積は重要な要因である。その中で、米の構成比が高いことが特徴である。全国平均より二倍以上だ。なお、おいしい米のおかげで、米製品、例えばお酒などもすごく有名でおいしいと思う。ここで白米の千枚田はとても有名だ。数が多い棚田は日本海に面して、小さな田が重なり海岸まで続く、国指定されている文化財産名勝でだけではなくて、観光地としてもいい場所だ。残念なことは、近江町市場にいる時間が少なくて、有名な場所は兼六園だけ行った。もし石川県に行くチャンスがもう一回があれば、ほかの場所に行きたい。

２．職場体験篇

私はカネヨ醤油という会社で職場体験した。カネヨ醤油については少し紹介したい。創業大正 15 年、つまり 1926 年。もうすぐ百年の企業だ。創業者は上江与さん。カネヨ醤油のブランド「与」の由来だ。はじめて「与」を見た時、全力を尽くして、一番いい商品とサービスをお客様に与える気持ちを感じられる。今会社を経営している三代目と四代目（三代目の娘）から教えてもらった会社は三代目から機械を入れながら自社製造を続ける。

最初の日に三代目から簡単な醤油作りの手順を教えてもらった。カネヨ醤油の原材料は大豆（脱脂加工大豆、小麦、食塩、種麹（麹菌）、アミノ酸液だ。アミノ酸液は一部の醤油屋が入れるものの、人の健康に対しては悪い影響が全然ない。そして、四代目から醤油作りの二つのポイントを教えてもらった。ポイント①は麹づくり（大豆＋小麦＋麹菌）であり、ポイント②は諸味（もろみ）づくり（麹＋食塩水）である。あとは約１年間の発酵熟成だ。最後は圧搾だが、詳しくは事後研修報告をした時紹介したため、ここでは省略したい。別の職場体験グループと違い、今は醤油発酵中であったため、私自身で醤油作りの機会がなかったことは本当に残念だ。その代わりに、新商品ワイン醤油の企画案を考えた。私にとっては、ワイン醤油の特別な部分はワインである。これに基づいて、紹介したほうがいいと思う。例えば、お年寄りに対して、ワインの成分は血管を柔らかくする。女性に対して、ワインは美容の効果をもっている。パンケーキにかける醤油と合わせて、セットの形式で売ったほうがいい。それぞれの考え方もう三代目に伝えた。やはり、効果の証明は難しいことである。

最後の日に、カネヨ醤油の魅力をまとめた。カネヨ醤油は能登の豊かな自然と水，そして伝統な技術が生み出す醤油である。家族で手作りし、甘味に仕上げているのが特徴だ。

３．キリコ体験篇

十日間の中で、キリコは一番印象を残している。辛さと成就感が交じっている。灯り舞う半島能登のキリコ祭り。キリコまたはほうとうと呼ばれる巨大なキリコを使うことを特徴とするものだ。日本で育まれた美意識と純真な祈りの精神を色濃く残す伝統的な祭礼である。地域によって御明かしとも呼ばれる。半日のキリコ体験は本当に疲れたが、人々の熱意または自分の居場所に対しての愛を感じられた。中国にはこのようなお祭りは無く、その迫力に圧倒されたのが最初の印象だった。キリコには様々な装飾が施されており、和紙や文字や紋、絵などが描かれており、それを見ただけでも美術品ではないかと思えるほど、立派なものだと思う。キリコはたくさんの人の手によって、担ぎ出されているような感じで、人々の威勢の良い声に出して、町全体が盛り上がっており、私のような外部から訪れた人間にも親しみなどを感じられた 。辛いが、すばらしいお祭りだと感じた。

４．地域創成と未来の展望篇

人気になる方法はいくつかある。発表の時に述べた通りに、石川県内または付近の県の日本語学校、専門学校、大学の国際部とつながって留学生の文化体験活動、ボランティアプログラム、ホームステイなどを通じて地域に来てもらう方法である。家を買って住む人に対していろいろなサポートをする。パッケージツアーを作る。詳しい日程、観光スポット、行き方などを案内する１日のモノづくり、仕事体験のプログラムまたはツ

アー、地域の人を結ぶ場所・プログラムを作る、などである。私は、ほかの方法を勧める。それは漁獲体験である。専門の場所の釣り体験、未経験の私に対しては興味がある。もしできれば、釣り大会などを行えば、人気になれる。しかし、本当にうまくできるかどうか、これは自信がない。

留学生の私にとっては、石川県の見学に参加する目的として、まずは日本語の能力を向上したい。そして、日本の社会や社会ルールなど、簡単に理解したい。日本のキャリアについて、社会人基礎力というものを私もう一度深い観点から認識したい。①前に踏み出す力、②考えて工夫する力、③チームで働く力の基礎を学校教育でも養い、さらに社会でも育成していく。私にとって、どのような仕事でも、その三つの力は必要であると思うので、見学に従って、もっと意味を理解したい。10 人のチーム、文化の理解は、多少勉強になった。将来就職をする時、いい印象を与えるかもしれない。それだけではなく、今回の活動によって、私は日本の文化もっと深く理解した。自分の視野と未来の展望ももっと明らかになった。

最後に、この勉強の機会をくれて、本当にありがとうございました。もしチャンスがあれば、参加したいと思う。

地方問題や解決策

劉　忠銘

近年、大都会に憧れる若者がほとんどである。なぜこのような現象を形成されたかというと、大都会に資源が豊富で、都市生活も豊かであるからである。その豊かさを追求するため、地方の人口がだんだん減少し、過疎化社会が無視できない問題になってしまった。そのため、地方創生や人材を保つことが何よりも重要であろう。私は今回のインターンシップに参加することを契機として、改善案やアイデアを生み出したいと考える。十日間で生活体験、地元の住民との交流、観光や伝統産業の見学を含んでいる。そして、当地の伝統的な祭りにも実際に参加したため、非常に充実した十日間を過ごした。今回見学しに行ったのは石川県の能登半島にある志賀町という町である。周りに様々な観光地があり、巌門や原発旧跡はもちろん、そのほか、海に臨んでいるから、近くに多くの海浜がある。夕日の海を味わうことも大変な魅力ではないかと思われる。また、大小の神社が多く建てられ、神社好きの人に対し、行く価値がずっと増えると私は考える。一方、藤井氏によると、「2011 年、『能登の里山里海』は『トキと共生する佐渡の里山』とともに世界農業遺産（GloballyImportantAgriculturalHeritageSystems=GIAHS）に認定された」（能登の里人ものがたり世界農業遺産の里山里海から，藤井満，フットワークス，2015，p8）というように、世界的に認められ、その魅力が一層増えるだろう。滞在した間に、様々なところに行き、その途中に地方のある現状が分かった。それは地方の過疎化問題である。何人かしかいない村落から何百人がいる村落まで同じ地域のあちこちに分布されている。その人口の過疎化から起こった問題が発展しづらいと考える。なぜかというと、人口が少なければ、大企業が当地に工場を建てるか、事務所を新規開設する可能性が極めて低くなり、それとつながり、地元の住民の一人ひとりの就業も不可能になる。それにより、地域活性化することがどんどん厳しくなる。また、企業がなければ、第一次産業しかできなくなり、様々な関係性から、大都市と比べてみると、非常に堅苦しいことであると思われる。しかしながら、地方が完全にメリットがないとも言えないし、都会も完全にデメリットがないとも言えない。なぜならば、樫野氏が自動車を例に「時速 100km で高速道路を走り続けているような街だ。そのため人々は日常的働いていたが、その時はそれが普通であり、刺激的でもあった。そして時々地元神戸に帰省する度に、青い海と空、緑の山、暮らしの穏やかさを感じ、『本来の生活ってこうだよなぁ』と感激していた。高速道路から一般道に降りてほっとする一方で、走っている車の遅さに似たもどかしさを地元の仕事や生活に感じることも多々あった。」という例を挙げた。そのことを私も彼と同じく同感した。実際に地方に行き、環境がよく、それとつながり、空気も新鮮である。また、人々の生活も長閑であることを感じた。

都会のような朝のラッシュも体験しなくても済む。一方、商工所で働いている清水さんからも似たことを聞いた。彼は、以前都会に行った。都会で就職し、二、三箇所に転勤した後、地元に帰ってきた。もちろん、地元に帰るのは家族と関係があるけれども、実際に帰って、地方の生活に慣れたら、全然悪くないと言われた。逆にかなりいいというような感想が出た。今回、当地の伝統的な祭りに実際に参加した。それは、代表的なもので、キリコというものでした。キリコはなにかというと、「キリコは、ひとことでいえば巨大な切子灯籠であり、代表的な形としては背が高い直方体状で、前面中央部には漢字 3 文字で表した『キリコ吉祥文字』と呼ばれる地区ごとの願いや祈りを込めた文字を配し、『後美人』と呼ばれる背面には様々な絵（武者絵や風景画など）が施されている。中に灯り（昔はロウソクその他を使用したが現在はだいたい電灯）が入っている。上部には屋根や飾りが付いている。」（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%83%BD%E7%99%BB%E3%82%AD%E3%83%AA%E3%82%B3%E7%A5%AD%E3%82%8A，最終閲覧日：2018 年 10 月 24 日）というものである。実際に担いでみると、直接に感受したことが、そのキリコの重さである。住民たちが神明の敬意を表すために、300 キロの重さがあるキリコを作った。経験ある壮年が少なくても 4 人必要である。最低限の必要といっても、人がいなければ、体力が足りなくなったときに、チェンジすることができないから、長く続けることがさすがに無理なことである。それによって、私たちが中に入って、1 日未満にして、体が潰されてしまった。一方、このような伝統的な祭りが私たちにとって、魅力的なことだと思われる。なぜかというと、実際の体験することと外で見ることと全然違うからである。見るだけで、祭りの雰囲気を味わえるが、中に入ると、道具や人やそこで踏んだ土地も、すべてが一体になるということが見るだけでは分からないことである。体験したから、当地の住民たちがどこまで自分の文化を愛していて、守りたいということを、そのときしっかり分かった。しかし、今回は志賀町のキリコ祭りが本来は 2 つのキリコを担がなければならないが、人口不足の原因で、現在は一つしか担げなくなった。また、祭りを行いたいが、他地域から人を雇わないといけないという状況になった。少子化がこれからもっと進んでいくと、近い将来に、祭りが完全になくなってもおかしくない。それが志賀町ないし石川県が考えなければならないことである。どうすれば、どのような政策を出したら、人が来るのかを考えなければならない。私は 2 つの案を考えてみた。その一つは、違う産業がお互いに協力し、旅行事業を向上することである。今回、私は醤油に関し、カネヨ醤油に見学しに行った。そこで、醤油に関する様々な制作工芸を紹介してもらった。また、石川県では、醤油を作れる工場が規模に関わらず、大体 30 軒程度があるが、自動または半自動の機械を導入した工場が 5 件しかなかった。その中の一つがカネヨ醤油である。なぜ全ての会社が導入しないというと、やはり、購入するためには、膨大な資金を投入する必要があるからである。それにしても、現在の醤油の販売はかなり厳しい状態である。そこで私は見学プランを考えた。どのようなプランであるか

というと、例えば、今回私たちに開放した見学企業は醤油、豆腐や納豆、和菓子、石材及び水産で合わせて 5 社である。この 5 社の見学体験をつなげ、一日に 5 社を全部回って、一つ産業を形成することができるのではないかと考えた。詳しく言えば、醤油工場が工場見学や試食体験を出す。新作（今回のワイン醤油）や自慢の醤油で一品を提供し、人々に醤油の違いを教える。また、試食はもちろん、納豆や和菓子を実際に作ることも体験できれば、いいのではないかと考える。水産や石材も各自の特色があることを出したらいいと考える。例えば、水産の方は釣り体験や、新鮮な海鮮丼を提供するなど、様々なことが生み出せると思われる。石材について、彫刻の体験というような形でいいのでないかと思われる。これらの産業が協力し、そして、二、三箇所の観光地と繋がり、一日で廻り切り、こうすれば、一定程度の金額を設定すれば、試してみる価値があると私は考えるもう一つの発想は、移住体験のことである。それは何かというと、移住する希望がある人に住む場所を提供し、一週間で地域の住民と話し合ったり、実際の様子を観察させたりして、実際に体験した後に、移住するかどうかが決めやすくなると思われる。特に、一人ひとりが他県に移転することにより、様々な不安を持っているから、このような企画があれば、深く理解した上で、その後に移動しても、トラブルの発生も少なくなると考える。地方の人口が減少し続けていることが、東京に集中しすぎに比べてみると、非常に極端なことが分かった。しかし、現代社会にて、人々が都市に行くという憧れがある一方、その中に地方に行きたい、または自分自身が地方に合う人も必ずいると思う。そのため、地域各自に特有な魅力を発見することがとても大事であると私は考えている。

石川県と石材店での経験と感想

DOAN NGUYEN THAO MY
WYNNE KATHERINE

夏休みに石川県志賀町で十日間インターンシップツアーに参加したことは、いい体験だと思われる。インタネットで調べたことと実際に体験したことの違いが明らかになった。そこで、このレポートは石川県で体験したこと及び留学生の視点から考えた地方が抱えている問題の解決策について報告する。

まず、石川県全体の感想を報告する。石川県は日本らしいと言える。なぜならば、現在住んでいる東京は現代化しており、日本の伝統文化が混ざっているが、石川県は変わってきたことが少ないからである。家、生活、人間のコミュニケーションなど格別である。日本の都会なら他の国と違うが、田舎は大体同じである。石川県は東京にない自然の景色を所有し、現代になりつつも、保護した方がよい。経済について述べると、製造業、水産業および食品工業がかなり目立つ。石川県の人口が少ないので、ここにある企業は困っているのが理解しやすいが、人が少ないからこそ人と人の絆が強いのである。また、おかざま荘での生活に関してはいろいろな新しいことが勉強になった。現代化により、東京での生活はご飯がコンビニかファーストフードですむということになった。しかし、おかざま荘でほぼ毎日日本の伝統的な料理を用意していただいて、ゆっくりした生活を感じる。そして、日本人の共用バスのおかげで、人と人の関係が仲良くなっており、珍しいが、いい文化ではないだろうか。

次に、中島石材店での体験について報告する。中島さんは家業を継ぎ、石で作られているお墓やお風呂などを製造している。いろいろな東南アジアからの石を輸入していると言われた。ここで体験する前に、石材を製造する仕事ならばとてもかたいイメージをもっていたが、自分で石板と一輪挿しを作った後、製造業が実は面白いと思われた。なぜならば、念入りと集中力を磨くのができるからである。中島石材店はいろいろな種類の製品を製造しており、順調に経営している中小企業である。東京のお客さんに向けて会社を広げようというアドバイスもあったが、実はそのようなことは必要がないのではないだろうか。もし会社を広げても、将来の人材不足の状況の中、会社はそのまま発展するのができるか疑問になるだろう。それに、東京にも同じ業者が少なくないだろう。そのような方向より、むしろ地方の範囲でやりつつ、将来の地方の製造業を考え、地方の祭りなどでの石材の体験によって、石材製造の仕事を若者に紹介することができるのではないだろうか。このようなことで、興味を持っている人は生まれた地方を出ずに、先人の仕事を継ぐわけである。他の場の人を受け入れることより、むしろその場の人が残るように心がけたほうがいいと思われる。

石川には豊かな自然があり、文化施設や医療環境の整った様々なレジャー施設や温泉がある。石川は中世時代の産業文化の中心地であり、武家時代には輪島産の漆塗り、九谷焼陶器、山中漆器、金めっき、有名な食文化など多くの伝統工芸品があり、加賀食に代表される。だからこそ、私はそのすべてを夏休みに１０日間インターンシップに経験するチャンスがあると聞き、うれしかった。

私たちがそこにいる間、能登のキリコ祭りに参加する機会を得た。日本で祭りの公平な分かち合いを見たが、キリコがどれくらい重いか分からなかった。私たちが最初にキリコを担ぐチャンスを与えられたとき、私は正直、彼らが女性にそれを担がせてくれるとは思わなかったが、私たちがそれを担いだときに本当に驚いた。祭りは１日だけだったのだが、数日後には体の痛みや痛みが続くのを感じた。しかし、体が疲れているにもかかわらず、キリコ祭りに参加する機会があるだけでなく、祭りに参加した石川県民は皆とてもオープンで私たちを歓迎しているのが本当に感動した。祭りに参加している間、石川民の皆が家族のようにジョークを言って、お互いの世話をしているのが最も一般的であると感じるということを聞いて驚いた。彼らがお互いに持っているその絆は、本当に都市で見つけることが難しいものであると感じた。

私が石川にいた 10 日間、多くの長所、短所の両面を経験した。海にとても近いという事実は、常に新鮮で美味しいシーフードを食べることができる。その上、私たちが訪れた場所が田舎に向かうということで、緑豊かな自然を体験して、東京のような忙しい都市ではそれほど多くは得られない。言うまでもなく、石川にあるスペースの量。石川では、土地が安いので、家は通常非常に大きく、広々としている。それはまた、アパートに住むより多くの人々が住居に住んでいる理由である。

石川にはすべてのポジティブなものがあるが、ネガティブなこととしては車を持たないとどこかに行くことができず、たくさんのエンターテインメントや場所がなく、一般的にはどこにも行かないことや行く場所がないほどの歩行距離。個人的には、石川はとても美しく平和な場所だと思う。そして、街の喧騒に疲れていたら、リラックスして自然に囲まれた静かで静かな時間を過ごしたいときに訪れる、すばらしい場所である。

石川県の能登での体験と思い出

NGUYEN THI LE HANG

１．初めに

2018 年の夏休み（8 月 29 日～9 月 7 日）に石川県の地方課題解決型インターンシッププログラムに参加した。留学生の立場から東京のような大都市ではなく地方に生活し、文化を学び、伝統産業を、実体験をして多くの新しいことを勉強できながら将来の就職に関する貴重な経験を積むことができた。このツアーにおいては自分のために新しいことを勉強するのではなく、地域の人のために地方創生、地方振興という課題にも取り組んで地方を再び活性させるために自ら新しい提案を考えなければならない。そのため、まず実際に体験したことをまとめたうえで、地方の魅力点を見るだけではなく、留学生の視点から問題点も見つけだしその解決方法を検討していきたいと思う。

２．体験したこと

２．１．文化体験

このインターンシップの独特な点はただ仕事、職場を体験するのではなくその地域の生活や文化も体験できるプログラムであり一般のインターンシップと大きな差がある。今回石川県の能登の里山に行き、こちらのお祭りに一緒に参加させていただいて貴重な体験をできた。ただ周りに立って観察するのではなく地域の人と一緒にキコリを担ぎ朝から晩まで地域の周りを移動した。キコリを担ぎ上げながら「させ、させ」と一斉に叫び「神様に差し上げる」という意味を表す。こうして皆の協力を感じながらお祭りはただの活動ではなく地元の人の結び、コミュニケーションを結ぶものであることを実感できた。さらに、子供たちに対しても教育の場になる。団体行動でどうやって皆を指導するか協力性やリーダーシップのスキルを学ぶことができる。ただし、人口減少や若者流出のためお祭りを継続することが難しくなってきて将来的にはなくなる可能性もある。だが、お祭りがなくなると地域に住んでいる人たちのつながりもなくなるということである。そのためお祭りを守るために外部の人の参加が必要になる。そこでどうすれば地域以外の人に来てもらえるのかが一つの課題になる。

２．２．伝統産業体験

今回のプログラムは主に食産業に関する仕事であった。自分が体験したのは納豆製造と石工製造であった。まず、納豆製造の高橋豆冨店では昔から主に豆腐を作って販売してきたがいろいろな事情で営業があまりよく進まないため、おからを使用してドーナツを作って車で地域、イベント、駅周辺などに販売している。納豆の対象客もほとんど決

まっている、いつも買っている人や近くのスーパーにしか売れない。お店の立地は観光地点に近い商店街にあるのに通っている人があまりおらず、店でドーナツ販売するにはなかなか難しい。そしてお店には製造所の隣に喫茶店のような小さいスペースがあり、それをどのように活用していけばドーナツ販売につながるかがもう一つの課題になる。

二つ目の体験は石工製造の中島石材店であった。こちらは地元の石や海外からも輸入する石を使って主にお墓に関する事業を行っている。それ以外にも庭造り、表札、看板など芸術に関する事業も大きい。実際に体験したのは表札を彫ることである。表札はサイズやデザインによって値段がかなり変わる。外から見ると簡単にできそうだが実際にやってみるとかなり大変で、集中力や忍耐力が求められる仕事である。中島石材店はこのようなモノづくり体験を事業として行っていき、それを通して実際お店の知名度を上げるという目的がある。しかし実際に行ったらお客さんが来てくれるかどうか心配であり、またこの事業を行うと主な事業に影響してしまう恐れがある。そのため、どうすれば外部の人に知ってもらうか、どのように行えば順調に行けるかはもう一つの課題になる。

３．課題

人口減少、高齢化、少子化が進んでいるのは日本全体の問題であるが能登の志賀町には若者転出のため人口減少の問題がますます深刻になっている。志賀町の農業は日本全体と比べて割合が高いが人手不足により農業継続者が減っていくため農業がだんだん減少していく状態である。人が減っていくことは地域の需要が減少することと同様である。こうなると地域の経済が進まないとともに仕事が生まれない、転出者が前よりも増えていく。移住者促進などのサポート、助成金などの対策が充実しているが地域の雰囲気があまり盛り上がってない状態では外部の人を呼び込むことはなかなか難しい問題である。

若者が転出し、高齢化がますます進んでいる志賀町には病院が少なくて速やかな対応はなかなか難しい問題もある。そして周りにドラッグストアも多くはない、道路の街頭も少ない、高齢者にとって不安全で若者にとって不便や退屈を感じる。このような不便点は若者転出の問題に拍車をかける。これらの問題につれて空き家が増える問題が生まれる。

もう一つの問題点は交通不便である。金沢駅から遠く離れて、バスの回数も非常に少ない一日は二本しかいないのである。電車やバスが多い地域に住み慣れてきた人にとっては不便を感じかねないのである。地域を創生するには観光を用いることは多いが移動手段は大きな問題になる。志賀町の周辺は巌門、世界一長いベンチ、機具岩などかなり有名な観光スポットがたくさん集まっているが交通が発展してないためほかの地域の人がなかなか来てくれない。レンタカーのサービスはなくはないが外国人などにとっては大きな問題である。

４．魅力点

人口減少により孤独な雰囲気や不便を感じることはあるが志賀町のいいところを無視するわけにはいかない。周りに多くの森や海に囲まれる志賀町は誰にでも緑が多い、空気がおいしい、環境がきれい地域という印象が残る。にぎやかなことが好きな若者にとっては退屈を感じるが高齢者にとっては静かで落ち着く場所である。そして、空き家が多いため土地税が都市と比べて非常に安いので生活の負担が少なく済む。都市に仕事が多く、収入が高いが競争もそれなりに大変で生活費もかなりかかっているのに対して志賀町では仕事が見つかりにくく、収入も多くない一方で競争がなく、生活費用も安いため都市と比べて生活の質はあまり差がないのである。また、人口が少ないからこそ人間関係が都市より深くて、人間の愛情を感じられる。

５．提案

人口が減っている志賀町に対しての対策は外部の人の参加が必要になる。それを実行するにはまず交通の問題を解決できなければ次のステップに進めないのである。箱根のように観光地を一周するバスを設けることによって観光客を引き付けられるだけではなく地域の人の不便点も解決できる。そして、志賀町のウェブサイトには観光スポットの紹介や生き方などを詳しく掲載したほうがより来てくれる人が増えることにつながる。特に外国人観光客は日本について不明な点が多いため宿泊、レストランなどのお薦めを載せると地域のゲストハウスや飲食店にとってとても有利になる。観光日程の中にまた中島石材店のようなモノづくりできる場所を紹介して日本文化に興味がある人が来てもらう。外部の人に来てもらうことによって地域の経済につなぐのではなく、地域の人が初めて自分の地域の魅力点を意識できるようになるメリットもある。

また、石川県内の日本学校、大学の国際課など尾連携して留学生に対して日本文化の学びなどのプログラムを通して志賀町の魅力点を発信していく。こうすると空き家を使用してゲストハウスを作ることによって空き家の問題を解決でき、仕事も生まれる。新しい仕事が生まれたら転出した人が戻ってくる可能性もあり、また新たな転出を減らすこともできる。

６．感想

この合宿型ツアーにおいては一般のインターンシップと違い、まさに地方らしいインターンシップであり都会には絶対体験できない独特なプログラムであったと思う。伝統的な仕事を体験できるだけではなく伝統的文化にも参加できてより日本の文化を理解することができた。都会でもお祭りがたくさんあるが自分もそのお祭りの一つの部分になって参加することは母国でさえ一回も体験したことがない。文化体験を通して生活の基礎的な能力も身につくことができた。研修中は台風の影響を受けたがそれでも日本に住むための避難知識などを知ることができて非常に貴重な体験であった。単なる勉強に

行ったのではなく自らも動き出して問題解決に取り組み、アイデア考え出す能力やチームワークなども向上できるようになった。これからも新しいことを勉強し続けて、自分に足りない部分を足して、能力をもっと磨いて頑張っていきたいと思う。最後に、この地方課題解決インターンシッププログラムを作っていただき心から感謝を申し上げたいと思う。

石川県西能登志賀町の発展を支える伝統的な文化

ダオティトゥ　ガン

１．はじめに

2018 年 8 月 29 日から 9 月 7 日にかけて課題解決型インターンシップで石川県西能登志賀町に行った。10 日間志賀町に滞在し、地元の文化体験(祭り)やセミナー(地方団体主催)・日本の伝統産業での就業体験をした。このインターンシップを通じて、地方の現状を事前調査し、その後日本地方文化の多様性を実体験することができた。このレポートでは、ツアーを通じて感じた地域文化の魅力、さらに地域復興のアイディアについて論じる。

２．石川県西能登志賀町の文化

２．１．食文化

石川県は、日本列島の真ん中に位置し、南北に細長いことから、地理的変化に富み「加賀」と「能登」に分けられる。そして、北陸の典型的な気候で、夏は蒸し暑いが冬は雪が多く降る。このような石川の風土で豊かな食文化を創造し、受け継いできた。さらに、2016 年 11 月 17 日に出版された『本当に住んで幸せな街』（光文社新書）の「食文化が豊かな街」ランキングによると、石川県の金沢市が国内 134 都市の中で 1 位に選ばれた。

２．１．１．海産

石川県は富山県、福井県とともに日本海の中央部に位置していることであり、「美味い海の幸」を語るには絶好の地である。では何故石川県の海産が美味いのか？その答えは陸上と海底の地形、そして水の流れと水塊構造に見いだすことができる。暖流の対馬海流と寒流のリマン海流がぶつかる日本海は、暖水性と寒水性の両方の生物が集まる豊かな海である。この海流がぶつかる境目を潮境といい、この潮境ができる海域は豊かな魚場となる。これは、寒流に含まれる栄養塩が暖流に暖められ、植物プランクトンが繁殖するためである。そして、この植物プランクトンを餌とする動物プランクトンが集まり、さらに、これらのプランクトンを目指して魚が集まるので、潮境が生じる海域は豊かな漁場になるのである。

石川県能登は長い海岸線を持ち、三方を日本海に囲まれる。ここに漁港が集中することから、海の幸とそれらを使った珍味が多い。能登の海鮮といえば、香箱がにやのどぐろ、甘エビなどが非常に美味しい。10 日間能登の志賀町で過ごして、お刺身やお寿司などの海鮮料理をたくさんいただいた。やはり東京のより海鮮は新鮮で極めて美味しか

った。

２．１．２．発酵文化

石川県は海に面し、新鮮な魚介がすぐ入手できる。冷蔵や冷凍技術がない昔は、特に適度に低い温度で雪がたくさん降る冬に保存方法を工夫する必要があった。そこで、発展したのが、「発酵」を活用する保存法であった。発酵食品を作り出すために、適した良い環境が必要である。カビなどの活動に適した湿度、冬の適度に低い気温や降雪、抜群の水の良さ、さらに原材料である素材の良さや加工技術、それを消費して評価する人が揃っていることなどが質の高さに結びついている。石川県はは米どころであり、そこから生まれる麹や糠は多様な発酵食品と結びついており、良質で豊かな水と気候風土に育まれた食文化を形成している。

石川県能登には東アジアから東南アジアとの共通する食文化や日本海の交流の影響が感じられる独特の食品や調味料が数多いと言われる。イカやイワシを原材料とする「いしる」、「いしり」と呼ばれる魚醤は東南アジアに通じる発酵調味料である。奥能登地方を中心に、様々な料理に使われる調理料である。秋田県の「しょっつる」、香川県の「いかなごしょうゆ」とともに日本 3 魚醤に数えられる。もう一つは「なれずし」である。米、魚、塩が揃うことによってなれずしが成立する。イカの塩辛、糠漬けなども多い。さらに、能登の各所に日本酒の酒蔵が点在し、能登杜氏が活躍している。そして、ワイン醸造、焼酎などもある。また、平安時代の延喜式に能登から献納された記録もあるナマコの腸の加工品である「コノワタ」などの塩蔵の発酵食品も特筆されるものである。10 日間の石川県志賀町に行きツアーを通じて、納豆と醤油の会社で実体験することができ、石川県の発酵文化について色々勉強になった。最近、伝統的な食品以外、ケーキにかけるメープル醤油のような新しい食品のタイプをたくさん作っている。

２．１．３．和菓子

藩政時代より茶の湯が盛んだった石川県では、茶道の発展と共に、様々に工夫を凝らした和菓子が作られた。茶席で使う生菓子、千葉子や、正月やハレの席でふるまう菓子、素朴な伝統の味など、様々な菓子があって、和菓子好きの石川人に愛されている。

インターンシップを通じて、お菓子のこぼりという小規模の企業で就業体験することができた。この企業は饅頭、蕨もち、どら焼きを中心に和菓子を作り販売している。最近、伝統的な味以外に、若者に新しい味も作っている。実体験の後に、和菓子の魅力は手作りだと感じた。しかし、この問題が見えた。一つ目は、従業員が少ない、後継者がいない問題である。志賀町の人口がますます減少している状態で製造業、卸売り・小売業の従業員数も減る。二つ目は機械がない問題である。使用されている機械は大半が古い。

２．２．キリコ祭り

キリコ祭りは石川県能登半島の魅力の一つである。能登キリコ祭りは 7 月から 9 月中旬にかけて能登半島全域でおよそ 300 回行われる夏祭りである。キリコ祭りには、「キリコ」と呼ばれる巨大な燈籠が威勢のいい掛け声とともにまちを練り歩き乱舞する。
能登志賀町のキリコ祭りに参加して、地元の人たちと交流することは非常に楽しかった。キリコ祭りには、すべての地域住民が参加する。地元で働く人、都会に出た人、すべての人が祭りを通じて一体となる。14 時から 22 時にかける志賀町のキリコ祭りは、都市の祭りに比べて時間が長かった。そして、自然に囲まれて祭りの雰囲気は私が住んでいる東京の祭りの雰囲気とやはり違い、極めてよかった。

３．地域復興のアイディア

石川県能登半島志賀町の復興をするために一番必要なものは人材だと思う。近年、志賀町の人口は減少し、2005 年から世帯数の減少も始まっている。志賀町の年齢構成は石川県、全国に比べて老年人口(65 歳以上)の割合は 10%以上、高齢化が進んでいる状態である。そのため、有能な人材を集めるために、地域での就職活動サポートが非常に必要である。志賀町で就職についての説明会や就業促進奨学金などの色々な就職支援を増やすべきである。

そして、観光客を集めるために、若者に流行している Facebook や Instagram などのソーシャルメディアで能登志賀町の旅行を広告する。アクセス、スケジュール、観光スポット、お土産処などを詳しく案内した方がいい。また、和菓子作り体験、発酵文化体験、石材一輪挿しの彫刻体験などの文化体験は魅力的な活動だと思う。
さらに、外国人の観光客を増やすために、日本語学校、専門学校、大学の国際部と繋がって、文化体験、ボランティアプログラム、ワークキャンプなどを作るべきである。

４．終わりに

以上、本橋では地域課題解決型インターンシップを通じて感じた石川県能登志賀町の文化魅力と地域復興のアイディアを述べた。10 日間能登志賀町に滞在し、こちらの自然の美しさと地元の人たちの暖かいおもてなしを実感した。良い点の以外に、公共交通機関の不便やスーパー、コンビニエンスストアなどが少ないという悪い点も見える。これから、地域復興のために、魅力的なところを発展し、一方、良くないところを改善するべきである。

参考文献

１．石川県のホームページ：http://www.pref.ishikawa.lg.jp/　（2018 年 11 月 14 日閲覧）
２．能登志賀町のホームページ：http://www.town.shika.lg.jp/　（2018 年 11 月 14 日閲覧）

一生の記憶

呉　尚蓉

石川県について調査した上で、実際に現地（石川県羽咋郡志賀町）に行った、古民家を宿泊拠点に地方団体主催セミナー地方のまつり文化や生活環境、工業産業を学んだ。伝統産業（醤油、納豆、水産、石材、和菓子)を実体験したことで、石川県の魅力体感と地域社会、地域性、地域に根付く産業を「知る」ことを目的とした。

また、東京ではなく地方で生活したこと・働くことについて考える。合宿型ツアーや事前・事後研修を通じて地域創生、 地域振興の課題の解決をする。

今回の現地は石川県志賀町である。志賀町の歴史は 1954 年、羽咋郡にて志加浦村・堀松村・加茂村・土田村・ 上熊野村が新設合併し、第一次志賀町になった。1970 年、志賀町と高浜町が新設合併し、第二次志賀町になる。2005 年、志賀町と富来町が新設合併し、現在の第三次志賀町となっている。

明治期以降は、学術の分野で日本を代表する学者や文学者を数多く育て、金沢を中心に培われたこうした高い精神性は、今日の学都石川の礎となっている。

また、県内の各地域において、人の暮らしの中で、長い時間をかけて形づくられてきた里山里海や豊かな食文化などについても、石川県独自の文化資源として位置付けられている。

このように、永い歴史の中で連綿と受け継がれ、発展してきた伝統的な文化に加え、近年では、オーケストラ・アンサンブル金沢をはじめとした新たな文化の創造や金沢城公園の史実に沿った復元整備なども進められており、これらすべてが石川の層の厚い文化を形成している。

8 月 29 日、北陸新幹線に乗って初めて志賀町のおかざき荘に到着した。自己紹介を通して、名前と顔を覚えた。

8 月 31 日、産業について:清水さん(富来商工会)と揚見さん(くまの地域づくり協議会)講演を聞き、祭り体験について参加する予定であった。しかし 30 年ぶりの暴雨と 25 年ぶりの台風を遭った。活性化センターに行けないため、途中まで避難所に行って警報を待っていた。

9 月 1 日、矢田地区祭りに参加した、さしあげという活動を体験した。神台を手で上に上げること。また、一度地面近くまで下げてから、勢いよく差し上げるという象徴があった。この日、たくさん地元の人と私たちの学生団体、皆の力を灌いだ。

9 月 3 日と 4 日、伝統産業を実体験した。1 日目に西海水産で選別手順を追った。2 日目に高橋豆富店で納豆商品を作る体験をした。

高橋豆富店インターンシップを通して、納豆菌の発酵時間がわかった。

石川県インターンシップを通して、多くの人と友達になった。梢さんのコミュニケーション能力を身につけたいと思う。2 日目の時皆と一緒に餃子パーティーの準備をした。皆の力を発揮し、短時間内で完成した。自然文化の魅力体験の同時に伝統産業に新しいアイデアを思いついた。高橋豆富店の経営転形について、ブックカフェとか、ペットカフェとか、ベジタリアン専門店の提案をした。地域創生、 地域振興の課題を解決した。

参考資料

１.「石川の風土・歴史とこれまでの取り組み ‐ 石川県」
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/muse/jourei/kihonhousin/documents/syousai-1.pdf(2018 年 11 月 14 日閲覧)

コース感想

・事前研修に志賀町はどういう町なのかだいたい想像して実際に行くときはよりにわかります。事後研修にもう一回まとめみんなと相談していろんな意見を聞くことができた
・特にない
・今回のツアーがなければ、母国に帰るまで、日本の石川県に志賀町や矢田という地域を知るはずがありません。何も知らない地域についてゼロから調べ、現地でいろいろ体験して、最後大好きになるまで、非常に貴重な経験になりました。
・このツアーに参加できて本当に良かったです。このツアーを通じて、色々な体験することができました。そして短い時間で色々な人とあって、他の 10 メンバーと一緒に過ごして、仲良くなっていて楽しかったです。みんなはすごく真面目に参加して、積極的に意見を出しました。皆から色々なことを勉強することができました。
・事前研修は行く前にちょっとでも知っておくことができて、まだわからないことを実際に行く時に確認して最後事後研修の時にみんなと話し合ってより深く理解できた。
・貴重な経験でした

第二部

島根コース成果報告

概要及び日程

概要

事前に島根県について調査をした上で，実際に現地（島根県松江市，出雲市）に赴き，古民家及びゲストハウスを宿泊拠点，島根大学を拠点に，島根大学主催のセミナーでインターンシップ事前準備や地方の生活や歴史・文化，工業・産業，観光を学び，松江市や出雲市での生活，就業（ホテル，旅館，ゲストハウス）を実体験することで，東京ではなく地方で生活すること・働くことについて考える。合宿型ツアーや事前研修・事後研修を通じて地域創生，地域振興の課題解決を主体的に試みる，課題解決型インターンシップである。

日程

事前研修①：2018 年 7 月 28 日（土）於東洋大学白山キャンパス
事前研修②：2018 年 9 月 7 日（金）於東洋大学白山キャンパス
ツアー　　：2018 年 9 月日 8 日（水）～9 月 17 日（月）於島根県松江市，出雲市

日時	行程
9 月 8 日（土）	現地へ移動，古民家での暮らしを学ぶ
9 月 9 日（日）	インターンシップ事前指導，島根の魅力を知る（仕事編）
9 月 10 日（月）	就業体験
9 月 11 日（火）	就業体験
9 月 12 日（水）	就業体験
9 月 13 日（木）	就業体験
9 月 14 日（金）	就業体験
9 月 15 日（土）	島根の魅力を知る（実地編：出雲大社）（暮らし編）
9 月 16 日（日）	島根の魅力を知る（実地編：松江城）
9 月 17 日（月）	中間成果報告会
9 月 18 日（火）	帰京

事後研修　：2018 年 10 月 6 日（土）於東洋大学白山キャンパス

就業体験協力企業

業種	事業者名	ウェブサイト URL
ホテル	松江ニューアーバンホテル	http://new.matsue-urban.co.jp
旅館	竹野屋旅館	http://takenoya-ryokan.co.jp
ゲストハウス	出雲ゲストハウスいとあん	http://guesthouse-itoan.com

参加者名簿

	氏名	所属	学年	国籍
1	CHEN JUNPU	情報連携学部情報連携学科	2	中国
2	林　桐	文学部 国際文化コミュニケーション学科	2	中国
3	グェン　ティ　トゥイ	文学部 国際文化コミュニケーション学科	2	ベトナム
4	代　小敏	文学部 国際文化コミュニケーション学科	2	中国
5	陳　貝爾	経営学研究科マーケティング専攻	M1	中国
6	NGUYEN NAMKHAI	経営学部マーケティング学科	2	ベトナム
7	林　静	総合情報学部総合情報学科	2	中国
8	李　孟偉	法学部法律学科	2	中国
9	フィグラ　ダニエレ	経営学部経営学科	2	イタリア
10	NGUYEN THI PHUONG THAO	国際地域学部国際地域学科	2	ベトナム

引率：新井　保裕（国際教育センター）
現地コーディネート：佐々木　亮（島根大学国際交流センター）

古民家での集合写真

事前研修

インターンシップ事前指導

島根の魅力を知る（仕事編）

松江ニューアーバンホテル就業体験

ゲストハウスでの暮らし

竹野屋旅館就業体験

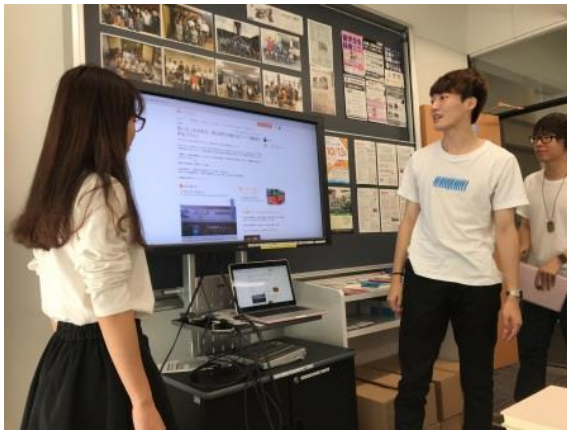
出雲ゲストハウスいとあん就業体験

島根を知る（実地編：松江城）

島根を知る（実地編：出雲大社）

中間成果報告会

出雲縁結び空港集合写真



事後研修

インターンシップの成果と対策

CHEN JUMP
林　桐
グェン　ティ　トゥイ

今回のインターンシップは色んな体験をさせていただいて、留学生の皆さんにとって大変貴重な経験だと思う。

私たち留学生はこれから日本での就職を目標にして頑張っている人が多いのだが、日本の職場で勤めている方は実際にどのように仕事しているのか、分からない人が多いと思う。今回のインターンを通し、日本の職場のマナーや文化を体験した。また、同僚および上司と部下共に働いている姿を見せていただき、これから日本での就職に非常に役に立つと思う。

最初は色々不安だったが、幸い、今回のインターンシップの担当者たちは非常に優しい方なので、私達が疑問を持ったところを分かりやすい日本語で丁寧に教えてくださった。アーバンホテルから配られた資料も重要な説明がたくさん載っており、大変に助かった。

私たちが泊まったところは持田地域にある古民家である。バスは平日にだいたい 30 分ごとに一本、週末は１時間ごとに一本である。バスに乗るには、バスカードか現金が必要なので、お支払いとしては非常に不便だと思う。しかし、人口が少ないため、これ以上交通を改善しても、利用者を増やせないなら、政府の負担になるほかない。

島根県は最近、観光業に注目し、島根の現状を改善しようとしている。その一つ、広島からのワンコインバス（外国人の方なら５００円）に乗れる政策は非常にいい案だと思っている。しかし、私たちが日本に居てからもう３年間経ったが、広島から５００円で島根に行けるのは全然知らなかった。広島国際空港で、島根の旅行パンフレットに載せたほういい効果があるではないだろうか。島根の魅力および最近の観光政策をアピールするには、マスメディアの力を貸さないといけないと考え、IT 産業が盛んである島根はネットで新しい媒体を使った方がより効果が出るだろう。そしてそれ以外に気づいたことは、島根で使用済みのバスカードは廃棄せず、そのまま店に渡すとドリンクやポイントなどのような特典をもらえるのは非常にいい政策だと考える。公共交通の利用促進にも役立つだろう。地元の一つのチャーミングポイントだと思う。たぶんこれに興味がある観光客もいるだろう。

また、島根県の歴史文化が非常に長いので、神話や逸話などの面白い題材を使用し、島根県を舞台としてアニメや、小説のような作品を作れば、聖地巡礼にくる観光客も増えるだろう。特にご縁に繋がり、島根県の魅力を発信する話は素晴らしいアピールだと

考える。続いて、島根県の美味しいものがたくさんあると思う。このようなアピールを通し、美味しいものを含め、紹介する。故に、島根の魅力をもっとたくさんの人に伝えることができる。

日本ではゆるキャラを通し、地域のことを宣伝する案もあり、良い効果を与えた。島根県のゆるキャラ『しまねっこ』も非常に可愛くて、人気があると思う。したがって、ゆるキャラの宣伝も力をいれる必要があると考え、地域のことがもっと注目されるように、可愛いゆるキャラは絶対に地域文化発散の架け橋になれると考える。インターネット上も『しまねっこ』に関する情報がたくさんあり、かわいいと思うのに、由来を知らない人もたくさんいる。ゆるキャラの人気を活用し、地域に活力を注入できるだろう。

それに加えて、島根といえば、有名な温泉がある場所だ。例えば、日本最古の温泉の一つとして「玉造」である。玉造の湯はその優れた泉質・効能から「神の湯」と称され、2016 年から始まった「温泉総選挙」では記念すべき初代日本一に輝いた。また、美肌効果に優れた泉質で女性からの人気も高く、「ニッポン美肌県グランプリ」で 4 年連続で日本一を獲得した島根県を代表する、「美肌温泉」としても親しまれている。改めて考えると、このことが素晴らしいところではないだろう。現在、女性がキレイになることが大切だ。色々な方法の中で、「島根の美肌温泉」をアピールしたら、日本の女性だけではなく、世界の女性にも気にすると考える。ただ、どうすれば、皆に知ってもらえるようになるだろうか。現在、インスタグラムやフェースブック、ツイッターなど若者の間で流行っている。それで、私たちはこのウェブサイトに広告のようなビデオ、記事を作れば、発信できると思う。

そして、新しい発想かもしれないが、地域振興として、芸術家とコラボというアイディアも非常にいいと思う。島根県立美術館のようなたくさん芸術品が所蔵される場所があり、その隣に縁結びとしての人気の観光スポット、《宍道湖うさぎ》がある。このような彫刻作品は地域に活気を与えている。また島根県は縁結びに繋がっているご縁の国である。もしこれをテーマとして、有名なアーティストとコラボし、ランドマークになる作品を作れば、より多くの観光客が島根県に入り込むだろう。もう一つ気になることは島根の伝統的な文化を体験できれば、もっと観光客が日本の文化と歴史を触れると思う。例えば、醤油を作ることや島根のお酒を作ることなど体験できたら、観光のツアーがもっとも楽しくなるのではないか。

仕事が終わった後に、東京ではなかなか見かけない島根の地元の料理と島根の日本酒を初めて試しに行った。日本酒を頼んだ時に、グラスの下に小皿を置き、そしてお酒を多めに入れ、溢れて来たお酒もサービスとしてくれるのが日本のおもてなしだそうだ。これは初めて知った。

以上の事は今回のインターンシップを通して感じたことと地方創生および地域振興のアイディアである。私たちグループ三人はぜひ今回のインターンシップで勉強したことを活かして、将来日本で就職したいと思う。島根県の地域文化と今回自分が感じたこ

とを発信し、より多くの人に島根県の魅力を伝えたいと思っている。

島根県でのインターンシップ後の成果と感想

陳　貝爾
NGUYEN NAMKHAI
代　小敏

１．はじめに

２０１８年度の夏休みに１０日間、島根県で有意義なインターンシップを参加させてくれて、まことにありがとうございました。島根県でいろいろな人に会えたり、一緒に仕事を体験できたりして、将来にやりたい事を多少想像ができた。
では、まず島根県についての歴史と文化を述べて、次に体験できたことで、最後に意見と感想を述べる。

２．島根県の歴史と文化

２．１．歴史について

神様の国と知られる島根県は原始時代から現れ、歴史的が長くて、文化的も豊富である県である。

２．２文化につて

島根県と言えば、「しまねっこ」というシンボル的なキャラクターがいて、可愛くて、その印象がすぐに頭に残った。そして、島根弁もあって、わかりにくくて、面白かった。島根に到着したとたん、第一名物の出雲そばも食べてみて、味があっさりで、さすが島根県の名物で美味しかった。

３．「いとあん」ゲストハウスで仕事を体験した事

仕事の現場で働いて、皆が仕事の内容的にちょっとショックを受けていたが、一緒に頑張って、チームワークの精神で仕事をしながら、時間内に終わらせて、効率がどんどん上がって、５日間でついに完璧にインターンを終了した。
私たちの中で一番印象が今でもまだ残っているのはオーナーさんの「しほさん」のことである。彼女は出身が神奈川県であるが、島根で一人で企業し、いろいろなプロモーションを活用して、すごく素晴らしいと思っていた。彼女が本当に私たちの手本になったのではないかと思った。彼女のような勇気を持って、将来にあのような勇気で、生きていきたいと思っている。

４．島根県についての意見

自然を優先し島根県の景色がとてもきれいで、そして昔の人たちのおかげで出雲大社と松江城ができていた。観光的に日本中で他県と負けないと思うが、交通機関がなかな

か不便で観光業界がなかなか盛んでいない。とても残念だと思っている。そのため、近い将来に交通と観光プロモーションを改善してほしい。

そして、県内人にも県外人にももっと魅力をもっと増やしてほしい。なぜならば、人口を増やさないと、県が絶対に発展していけないはずである。そのために、いくつかの対策を述べさせていただく。

・たくさん仕事を作ってほしい。
・遊ぶ場所を増やしてほしい。
・値段を調整してほしい。（田舎なのに、東京の値段とかわらない）
・外国にもっと広告活動を実施してほしい（漫画キャラクターや「縁結び」の文化など）

上記の問題を解決できれば、人口の問題が解決だけではなく、観光客に当地の寂れる感がなくなって、訪問観光客が増えるはずではないかと思う。

５．感想

見学ツアーを通して、よい点がたくさんあるほかに、まだよくない点がまだあると思って、述べさせていただく。

５．１．よい点

・地方の文化、観光スポットが見られて、日本のことがもっと好きになっていた。
・地方の人たちが素晴らしくて、とても親切で、いつかに戻りたいと思う。
・東京より貧乏であるというか地方の不便さを知って、グループのメンバーと一緒に行動して、チームでのワークができるようになっていった。

５．２　まだよくない点

正直にいうと、今回のツアーの内容では私たちにもっと合うインターンシップを行わせていただきたいと思っている。なぜならば、今回の仕事の内容はいつものアルバイトと違いなく、ほとんど力だけでもできる仕事だったのだ。もっと頭使う必要である仕事をしてみたい。そういう仕事をやらせてもらいたい。将来に役に立つはずである。

そして、十日間のツアーがちょっと長すぎると思う。ちょっと短ければ、他の企画が出来て、有意義な休暇期間ができるではないだろうか。

６．まとめ

本ツアーに参加させていただいて、たくさんな経験が出来たり、友達もできたりしていまして、誠にありがとうございました。将来にたくさんなイベントをもっと参加させていただきたい。お疲れさまでした。

島根県のインターンシップについて今後の課題と対策

林　静
李　孟偉
フィグラ　ダニエレ
NGUYEN THI PHUONG THAO

１．はじめに

2018 年 9 月 8 日から 9 月 18 日まで 10 日間にかけて島根県でインターンシップに参加した。就業先は竹野旅館であった。仕事体験の以外、様々な活動にも参加した。本稿では、第一に、島根県の産業について述べ、第二に島根県で体験したことを申し上げ、第三に観光と意見を述べる。最後に島根県の課題と対策を検討したい。

２．島根県の産業

２．１．水産業

日本海に面しており漁業が盛んに行われており、総漁獲量（2011 年）は 15 万 3,000 トンで中国・四国地方で最も漁獲量の多い県である。2010 年の調査によると、ベニズワイガニの漁獲量が 5,163 トンで全国 1 位、ブリ類の漁獲量が 17,963 トンと全国 1 位、アジ類の漁獲量が 33,432 トンで全国 2 位を誇っている。 また、宍道湖などで採れるしじみは、2014 年(平成 26 年)には 3622 トンで 4 年ぶりに日本一の漁獲高となった。実際に、島根県にいた間では、多数の海鮮専門店が充実しており、スーパーの海鮮が東京より安く売られていることが分かった。

２．２．農業

全国的に畑作物等への転換が進む中、島根県の米の割合は全国、中国 5 県と比べると依然高い状況となっている。ただし、高齢化のため、農業就業人口及び耕地利用率が年々減っている。それにつれて、農業産出額が年々減少する傾向にある。

２．３．製造業

平成 29 年島根県の製造事業所が平成 28 年に比べて 123 事業所が減少した。島根県は鋳造関連産業が盛んでおり、平成 28 年の銑鉄鋳物の生産量は全国 3 位、生産額は全国 4 位である。企業は 1960 年代以降に進出した誘致企業が中心だが、事業所規模が大きく、技術レベルが高いことも県内鋳物業界の特徴である。

２．４．小売業

百貨店(日本百貨店協会に加入している店舗)は松江市と出雲市にある一畑百貨店の2ヶ所のみである。ただし、一畑百貨店や広島県の福屋などの百貨店が小型店舗を展開している。

大型スーパーでは、イオン子会社のイオンリテール、広島県のイズミなどが島根県内で総合スーパー(GMS)やショッピングセンターなどを展開している。出店が進む一方で、競争が激化し2000年代には複数のGMSが閉店している(マイカル(現:イオンリテール)の浜田サティ(現在のゆめマート浜田)や出雲サティ等々)。

３．体験したこと

実習中は最初に島根大学でビジネスマナーや島根県の基本情報、ホテル業界の現状について勉強した。2日目以降はスケジュールに従って実際に接客から、食事準備や部屋掃除などを体験し、竹野屋旅館の歴史や営業について勉強した。最後の2日間は、出雲大社、松江城の観光をきっかけにして、島根の魅力を感じた。最後の日には、これまでの感想をまとめ、プレゼンテーションを作成して就業体験で学んだこと、そして課題の解決についての報告会を行った。

４．観光と意見

今回のインターンを通して、島根県に求められているのは単純に外国人観光客の増加だけでなく、島根県の魅力を感じて、本当に島根で働きたい、生活したい人たちも必要だと分かった。確かに、島根へ旅行に行く観光客数は全国平均より少ないデータが出ていたが、交通不便の影響や宣伝不足だと考えられる。近くの広島や大阪と連携し、ツアーを作るのは方法の一つである。また、日本人に対する「ご縁」を宣伝ポイントとして、外国人観光客紹介することである。SNSや海外に拠点がある旅行会社を活用して、島根の魅力を世界中に知ってもらう。

５．仕事体験の感想

私たちは竹野屋で五日間働いて、竹野屋が完全に日本伝統旅館なので、色々な日本伝統的なことが勉強になった。仕事の間に旅館の従業員から「おもてなし」という言葉が何度も聞いた。この言葉の意味を理解し、私たちもこの五日間に勉強した旅館業の経験を「おもてなし」で5個単語にまとめた。

まず、接客業といえば、もちろん一番重要のことはお客さんだ。もしお客さんがいないと、私たちの旅館やホテルなども存在しない。そこで、「お」をお客さんの意味に理解する。

次が「も」、私たちが「文句無し」にまとめた。旅館もホテルもお客さんからきっと色々なお願いを頼まれて、この時に私たちが忙しい時にも、自分は気持ちが悪い時にも、お客さんのお願いがある時に絶対に断ったり、文句を言ったりしてはいけない。

続いて、「て」は「丁寧」である。旅館の宿泊者がほぼリラックスのために、私たちの旅館に来られるので、誰でも表情がない顔を見たくないと思う。私たちは感謝の気持ちを持って、スマイルして、丁寧に扱うべきである。

そして「な」が「慣れる」。旅館としては、色々のお客さんがこられるので、例えば、他の国からのお客さんがそれぞれの習慣や風土などが日本と全然違うから、自分があの習慣を見慣れないと、それを理由として、怠慢してはいけない。私たちはどこのお客さんにでも慣れるように努力すべきである。

最後には、「し」を「至急」にまとめた。お客さんはお願いがある時に、私たちがすぐ、至急にお客さんに対応することも旅館業の中では非常に重要なポイントである。

以上の 5 点、お客さんに、文句なし、丁寧に、慣れるように、至急に対応することは私たちがこの五日間のインターンシップの間にまとめた。

後は、この五日間でとても重要な現象を発見した。竹野屋で宿泊者の中に一人で旅行する人が結構いた。旅館の売上は、大体の「宿泊単価」×「一室あたり宿泊人数」で簡単に計算できる。そこで、一人宿泊が旅館の売上減少に大きな影響を与えると思う。また旅館の和室部屋がほぼ定員が 3、4 人以上、今の一人旅行が流行しているときに、やはり一室あたり定員が多い和室旅館はもっと小さい部屋を作ることがいいと思う。また実は日本の旅館業の料金受け取りは普段は宿泊人数単位で計算している。それぞれの部屋で定価を決め、小さい部屋が低く、大きな部屋が高くなるように設定することがいいのではないだろうか。

６．島根県の課題と対策

これから島根県の地域振興に向けて、今後の課題や対策について、9 月のツアーで得た経験や気づいたことを踏まえながら、私たちのグループの意見を述べていく。

まず、As-Is（現状）について 2 つの問題点が挙げられる。

一つ目、島根県全地域で交通機関が不便に感じた。具体的に、出雲大社からの最終バスは 18 時に出発し、割と大きな都市である松江からのほとんどの最終バスは 19 時頃に出発する。要するに、完全車社会となっており、車を簡単に手に入れない観光客にとっては非常に不便な状況である。

二つ目、現地での観光サポートは十分と考えられるが、特に海外で十分な宣伝が行われていないと感じた。従って、海外の方の目から見ると聞いたことすらない観光地に行かないだろう。

そして、To-Be（望ましい状況）について、私たちの意見を紹介する。まず、交通機関を夕方にも動かすことさえできれば、訪れる観光客は時間を気にせず気軽に観光出来るようになるだけでなく、すでに松江市や出雲市で深夜まで開いている多くの居酒屋がさらに儲かるのではないかと思われる。そして、海外で知名度を上げるのに対しては、SNS や海外に拠点がある旅行会社を活躍し、日本観光者のリポーターを対象に、島根の

魅力を多くの国の方に知ってもらうことが望ましいかと思う。例えば、様々の国からの島根大学の留学生のコネクションを駆使し、各国の人気な SNS を通じて宣伝することも一つの提案である。

最後に、より適した宣伝を行うために、非常に多くの外国人観光客を招く旅館、具体的に出雲と玉造温泉の旅館、の強みや特徴の比較をしてみた。

私たちのグループがインターンシップを行った先、そして出雲の代表的な竹野屋旅館では、3 つの特徴が挙げられる。竹野屋旅館でメインの観光アトラクションというのは、出雲大社である。毎年（特に神無月に）日本全地域から多くの観光者が参拝するために訪れることが主な理由である。そのため、その周辺のほとんどすべての店が出雲大社と合わせて、営業時間を調整している（ほとんどの店は 17 時まで）。

一方で、玉造温泉でのメインなスポットというのは、温泉である。一年中全国だけでなく、海外からも多くのお客様が日本の伝統的な旅館でリラックスするためにわざわざ島根県に訪れることが主な理由と考えられる。夜景も非常にきれいなため、玉造温泉の周辺の店がほとんど夕方の営業となっており、日が暮れると年齢や国籍関係なく、浴衣を着る人（特にカップル）が散歩する町である。

以上、島根県の地域振興に向けて、今後の課題や対策について、私たち竹野屋旅館グループの意見や気づいたことについて紹介した。

参考文献

１．「島根県」https://ja.wikipedia.org/wiki/島根県

２．「島根県」
https://www.pref.shimane.lg.jp/toukei/kakusyutyousa/syougyou_service/syougyoutoukei.html

３．島根県公式ホームページ https://www.pref.shimane.lg.jp/

４．島根の産業 https://www.shimane-style.com/profile/industry.html

（いずれも 2018 年 9 月 6 日閲覧）

コース感想

・非常によく企画されたツアーだったと思います。新井先生ももちろんですが、島根大学の先生達のサポートがなければこんなによく充実したツアーが出来なかったでしょう。
・島根県について様々な知識を身につけるようになったと思います。新しい友達もたくさんできて良かったです。
・いい経験を習得でき、島根の文化や歴史などの知識が広がります。楽しかったです。
・ホテルのインターンシップを通して、まず社長さんから島根県のホテル業界の事情を勉強しました。またホテルで挨拶と接客のマーナも勉強しましたし、宴会場の手伝いをする時も自分が知らないことをたんさん学びました。充実な五日間です。 今回の発表も多くて、自分の能力を鍛えるチャンスだと思います。
・特にありません
・事後研修で、私も含めて、少し成長したと感じました。
・今回のツアーは非常に貴重な経験で、地方の人々と仲良くなり、日本の文化や考え方などを少し理解できるようになりました

おわりに

本学が「留学生Ｉターン就職促進プログラム」の一環として平成30年度夏にはじめて実施した「地方課題解決合宿型インターンシップツアー」は、本報告書にまとめられたとおり、多くの参加学生にとって貴重な学びの機会となった。島根大学並びにくまの地域づくり協議会の関係者の方々をはじめ、この企画運営から事後処理までご尽力をいただいた多くの皆様に、改めて御礼を申し上げたい。

留学生の日本国内就職促進は、国が重点政策の一つに掲げる課題である。東京には日本で学ぶ留学生の約４割が集中しているが、東京の留学生にとっては、地方都市やその優良企業の魅力を知る機会が極めて少ない。結果として、東京の留学生は、東京の有名企業に就職希望先を集中させがちであり、その中で縁がなければ国内就職を諦めて帰国してしまう。せっかく日本で学んだ留学生を卒業すぐに母国へ帰してしまうことは、日本にとって損失である。特に若い働き手の不足に直面する地方都市では、新たな働き手として留学生に期待する声が大きい。

そこで本学は、「留学生Ｉターン就職促進プログラム」の実施を通じて、東京圏で学ぶ留学生に、地方都市の中小企業も含めて就職を検討できるよう情報提供やマッチングを行うことで、留学生の国内就職促進と地方都市の働き手不足緩和に貢献することを目指している。具体的には、今回の「地方課題解決合宿型インターンシップツアー」や、より短期の地方都市見学ツアーを通じて、留学生に地方都市での生活や仕事を体験する機会を積極的に提供しているところだ。さらに、地方都市の企業関係者を招いて説明会等を行ったり、逆に留学生を地方都市でのマッチング会へ参加させたりすることによって、留学生のＩターン就職活動をサポートしている。

近い将来、今回の「地方課題解決合宿型インターンシップツアー」参加者の中から、石川、島根、あるいはその他の魅力あふれる地方都市で就職し、活躍してくれる学生が一人でも多く出ることを期待してやまない。

関山　健（東洋大学国際教育センター准教授）